

医学教育シリーズ

学生に自律的行動を引き起こさせる指導法について —低学力・低意欲の学生への対応—

松 尾 理

近畿大学名誉教授

I 始めに

学生の潜在能力を引き出し、問題解決のための行動方法を自ら考え、そして自ら実践する能力を導出することは、学生指導にとって有効な方法である。それを学習面での指導および生活面での指導場面で活用するのが指導教員の責務である。その際学生に自律的な行動を自主的に起こさせるにあたって、あくまで対象となる学生個人を尊重し、個人の考える力を引き出し育てることが大切である。すなわち、学生の潜在的な能力をいかに発揮させるかが、現代の医育機関の課題であるとも言える。特に、意欲が低く低学力のために支援を要する学生達には、学年全体の学生を対象にした対策・対応などが当てはまらないことが多いので、そのため個別に学生の能力を引き出し、自発的学習を促し、自律出来る学生に育てて行く方略の実践が必要である。

具体的には、学生指導の多彩な場面で、学生に現れている変化や違い、成長や成果にいち早く気づき、それを言葉として学生にはっきり伝えることが必要である。それによって、学生がアクノレジメントを通して獲得する自己成長の認知は、次の行動やチャレンジに向けてのモチベーションとなる。すなわち、学生を認める気持ちを積極的に伝え、学生の「強み」「良さ」や「成果」「頑張り」などのポジティブな面を見つけ次第承認することが肝要である。換言すれば、最も効果的なアクノレジメントは、「学生が自分自身ではまだ気づいていないことを先に察知して伝える」とことと言える。それによって、学生は「自分のことをしっかりと見てくれている」と感じ、教員への信頼も生まれて来るし、自律化への第1歩になる。

II 低学力学生の問題

医学部入学定員の増加¹と関係すると言われる問

題学生には、単に基礎学力が低いと言うだけでなく、意欲が低いと言う問題も包含されている。学力は数字で示されることが多く分かりやすいので、学力に関しては比較的指導しやすいと思える。例えば、科目別あるいは領域別の評価（試験）結果が出れば、「君は腎臓の臨床問題が弱いなあ」とか言いながら、学力向上のために面談し学習指導を行える。しかし、意欲は定量しにくく、特に意欲の低い学生には特別な対応が必要とされる。

学力が低く、同時に意欲も低い学生への対応が一番の問題である²。彼らは教員との面談を「尋問」と感じる事が多く、その場を取り繕うことで面談を早く終了したいと思っている。その時の本音は、①成績が悪いことは、言われるまでもなく分かっている。②どんな勉強をしたかと尋ねられたら、「普通です」、「みんなと同じ位」とか言っておく。③どんな教科書を持っているかと尋ねられたら、「持ってます」と答える。試験が教科書から出そうな噂を聞いたならその本を買うけど、ちゃんと読まない。④ノートは誰かの良さそうなノートをコピーして持っている。⑤何時間勉強してるかと尋ねられたら、「2時間ぐらい」とそれなりの数字を言う。しかし、本当にそれだけ勉強したかどうかは全然別である。⑥誰と勉強してるかと尋ねられたら、「一人です」と言っておく。

このような心理的背景から、相当工夫をしないと、学生の心の内を理解できない。また、学生は家族に対しても大学生活を表層的にしか言わないので、家族からのメンタルサポートを期待できない。従って、個別面談を繰り返しても学生の心の奥にあるものを掴むのは非常に難しく、それゆえに学生の行動を変容させるにも道が遠い。

面談の際、教員が気をつけないことに、まず見た目の問題がある。簡単に言うと学生にとって先生方は心理的に威圧的で、「尋問するコワイヒト」と見ら

れている。呼び出しを受けたら、それだけで心理的圧迫を受ける学生もいる。そんな学生に対しても面談の場で、落ち着いて心安らかにホンネの話ができ、学生の本心が表に出せる話し易い環境を構築し、学生と良好な人間関係を指導教員が意識して作る必要がある。

III 意欲の問題

意欲がないような行動を示す学生が見られるが、学生の意欲を定量化するのにいろいろな方法がある。例えば、多数の項目を立ててアンケート調査し、それぞれの項目ごとに分析する。そして「君はクラス全体に比べてこうだ」と言うことができる。あるいは、観察法、面接法とか動的評価法³、パフォーマンス評価、あるいは Dynamic testing⁴ などがある。いずれにしても、細かく分析することで果たして意欲の低い学生の意欲を上げる方略が出てくるか、疑問である。

結局、意欲を定量化してもその結果が学生の意欲を高めることに直結しない。複雑な方法でいろいろ分類するより、意欲が高いか低いかと大別する方が実践的だと思われる。具体的には、医師になりたい動機を再確認し、動機が継続して学生の行動の基盤に関係しているかを分析する。そして総合的に判断して、意欲を高低のどちらかに分類するのも一法であろう。

意欲が問題にされるのは、後述の人間としての欲求構造との関係で、日本のように成熟した社会で、医療人になる目的で入学した人間の欲求がどのレベルかを理解することと関係している。

IV 学生へのアプローチ

学生を指導する方法として指示的行動と支援的な行動との二つがある。指示的行動というのは、教員が具体的に何を、いかに、いつ、どこで、と具体的に行動を指示することである。こう言われたら学生はもう言われた通りに「はいはい」と行動するしかないのがこの指導法である。

支援的行動は、教員と学生との双方向的な意思疎通を行い、傾聴し、学生がしたいことをうまくサポートする。例えば学生が勉学に行き詰った時などに、励ましの言葉を与えてほしいことがある。そういう時に学生の気持ちを察して何らかの励まし言葉をかけると事が有効である。このように教員が聴いてくれること、励ましてくれること、そして支援してくれることなどが支援的行動である。

V 学力と意欲の組み合わせ

学力も高い低いがあり、意欲も高い低いがあることから、それらの組み合わせで次のように分類できる(図1)。

A 高学力・高意欲：学力も意欲も高いこの学生たちに対しては特に何もしなくても十分満足している。学生本人に責任を持たせて自由にやらせることが出来、また学生も確信をもって勉学やいろんな活動に打ち込んでいる。しかし、いろいろ計画して実践している場合でも、時に不安を感じたり、計画通りうまくいかない場合には意欲低下になることがある。そのため、時折会って意欲がどう変わっているかを判断し、支援的な言葉を掛ける必要がある。要するに、すべて任せておいても大丈夫だが、遠くからそっと見ていて、何かあったら救いの手を差し伸べる事ができる対応姿勢が望まれる。

B 高学力・低意欲：学力は高いけれど意欲がない学生の例として、よくサボるけれど試験の成績だけいいな、という範疇の学生で、本来は学力も意欲もあったけれども、何らかの理由で意欲が落ちてしまった場合が多い。彼らはなんとなく自分の能力を疑っていたり、起こりもしない問題を気にしている。本心は先生方の介入を求めているような場合がある。

この学生たちに適切な指導は、指示的要素が少なく、上手な対話による支援的な行動である。学力はあるので、勉学に対してあまり細かく言う必要はない。支援の一環として励ましを与える。勉学の結果に焦点を当て重視するとともに、結果を褒めて意欲

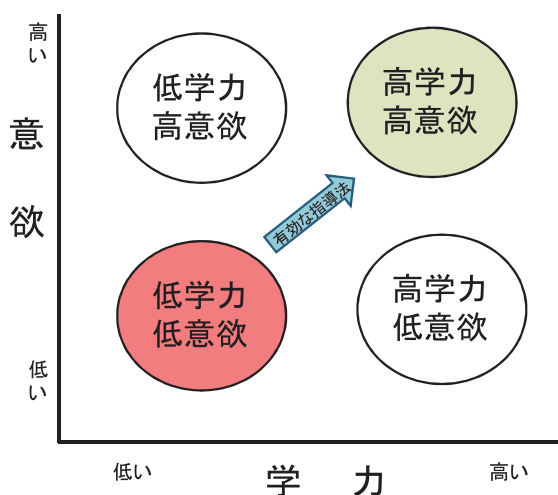


図1 学力と意欲の高低によるグループ分け
学力の高低と意欲の高低の組み合わせにより、4グループができる。学生指導上の問題は、低学力・低意欲のグループにある。

を高めてやる。しっかりと傾聴して、双方向の良質なコミュニケーションを実践し、進捗状況の評価する上手なコメントを行い、学生をその気にさせていく指導法が有効である。

C 低学力・高意欲：学力は低い、意欲だけはある学生たちである。講義室の前の方に座っているが試験ではひどいスコアをとる。遅刻も欠席もしないし、まじめそうに見える。何を言っても「はい！頑張ります！」と気持ち良い返事をするが、返事だけで実行が伴わないのが特徴である。

この場合の指導としては、指示的行動と支援的行動の組み合わせが有効である。学力が低いので学力向上のための指示的行動が必要である。努力の姿勢が伺えたら、意欲を上手に支援する。説明をしっかりと、納得させてからやっていく説得的なことも時に必要である。指導を継続していれば「少しずつステップを上がっているなあ」と学生が実感するのを確認できる。少しでも改善・向上が見られたら、これを励まし、伸ばすことを心掛ける。

D 低学力・低意欲：学力は低く、意欲もないこのグループの学生たちは、自己防御のための言い訳を構えて文句や注文が多い。自分のことは棚に上げて「僕が悪いのは大学のせいだ！」とか、「カリキュラムが悪いんだ！」とか言い逃れを言うことが多い。難しいのは、学生の苦情、不満が保護者を通して増幅されることである。勉強が遅れ、言われたことも十分実行しないのに、欲求不満が大変強い。落ち着かないし、はっきりしない行動が多く、心配することが多い。

従って、現実（低学力・低意欲）を具体的に説明して、良い方向への進歩が見えた時には、例えばそれが少しでも上手に強化していく。そして小さくても出てきた変化を捕えて承認し、学生にそのように行動したことで喜びを感じているかを確認していく。教員は落ち着いて、学生の進捗度を考慮しながら話をする。この時に指示的行動が相当必要であり、こと細かに指示をすることが有効である。

大学としての総評価は、低学力・低意欲の学生集団を効果的な学生指導により高学力・高意欲の学生集団に移行させることにより決められよう。

VI 承認

人間の本質として、我々は絶えず成長し続ける存在であるが故に、もって生まれた潜在能力を最大限に伸長・発展しようとする。こういう本質を備えている学生に、やる気を起こさせる内的な心の動きを引き起こして、上手に望ましい方向へ向かわせるのが承認である。

承認は、直接的に人を動機づけして行動の基盤を作ると言う意味で、人を動かす行動の原動力であると言える。人間は社会的な存在であり、承認は社会的な人間関係のなかで行われる。人間には他者からの承認によって自分自身を確認できるという他者依存のあるいは受け身的な側面がある。農耕民族である日本人は他者と同一の行動を求められていながら、逆に他人の目を意識している。すなわち、周囲との人間関係を重視した協調性が重要視される一方で、自分を肯定し、確認するためにも他人からの評価としての承認が欠かせないと言われている。

特に問題学生の人間としての本質を上手に知り、分析し、新しい方向へ誘導していくのが、問題解決の根本になる。そのために、まず欲求構造から理解する必要がある。

VII 欲求の構造

各種の欲求からなる欲求構造が階層的になっていることは良く知られている⁵⁾。その最上層に自己効力感や有能感がある。この自己効力感や有能感は自分に対する自信であり、承認されると自分の能力への確信度が上がり、自信が強まり、内発的モチベーションも高まって、自律的に動けるようになる。

医学部のような高等教育の医育機関に在籍している学生たちは、自己実現欲求、あるいは自我・自尊欲求が一番強い欲求階層になっていると思われる(図2)。従って、欲求構造の最下位にある生理的欲求や安全・安定の欲求にはほとんど意にも介さない。それよりも自分のあるべき姿、自分はどうかあるべきか、ということを真剣に考える存在である。問題は、低学力・低意欲の学生が欲求構造の最上位にある自

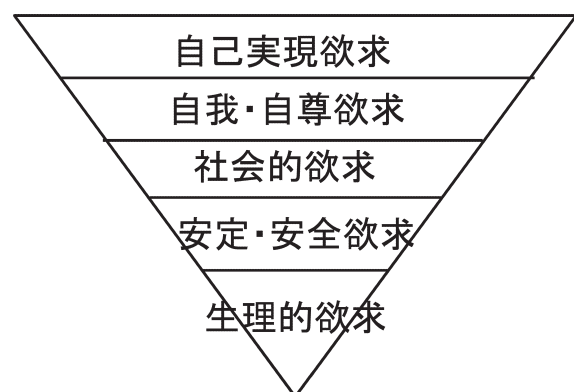


図2 自我・自尊欲求と自己実現欲求が優先している場合の欲求構造
社会が安定し、生きるための基本的な欲求が小さくなり、逆に高等教育を受け、医療人を目指す医学生にとっては、自己の発展を目指す自我・自尊欲求あるいは理想に近づくための自己実現欲求が大きくなる。

己実現欲求を意識して行動しているかどうかである。残念ながら、そのように行動していないと思われる。自分が有能な人間であり、周囲に良い影響を及ぼすことができると感じていないのである。

そのような学生の自己実現欲求をうまく満たして望ましい行動に変えて行くのが承認であり、承認を活用することによって学生の内面を育てて自律的な行動をとることができるのである。

VIII 具体的な方略：学生の生活を全把握

一番良いのは行動が生じたその場で承認することである。しかし、普通の学生指導では、面談ばかりで学生と共通の場があまりない。そのため、指導担当になった初期に2～3時間何か行動と一緒にする。例えば下宿のところまで一緒に歩いて、どういう道を通っているか、どこで買い物をし、どこで食事をしているかなど、何か共通体験を作って頂く。それを土台にしながら毎回の面談でさらに詳細な行動を聞きながら生活圏を把握する。その際、尋問にならないように言葉や態度などに注意が必要である。また、家族の状況、友人関係、講義室で座る位置など、多様なことを話してもらい人間性を総合的に把握する。

このように生活圏や人間性を把握できていると、週に一度の面談でもその中での行動について承認を上手に使うことができる。これを毎週繰り返していると、学生は少しずつだが階段を上がるように自律化への道を歩んで行くことになる。

IX 学生の自律化のため

承認の効果を上げるために、良いあるいは望ましいと思われる行動が出たとき、その行動を具体的に承認することが大切である。期間をあけず、早目に承認する。この時一番大事なことは、「心から承認する」ことである。承認に心がこもっていないとすぐ分かる。学生への対応に心をこめると言うのは、換言すれば、学生への愛情の表現でもある。心をこめて、最適な場所で、最適なタイミングで、最適な言葉を駆使して承認することが有効である。

学生の自律化のためには、内発的モチベーションを高めることが必須である。そのために、成績や講義の出欠状況の評価などを学生本人に正しく把握する。そのため学務課から出欠データなど入手しておく必要がある。と言うのも、できるかぎり具体的な事実や客観的な情報に基づいて褒めたり、認めたりすることが効果的だからである。

学務課が把握できないことは、学生の友人や先輩など学生の周辺から情報を集める。例えば、「今日は

木曜日だからクラブがある日で、クラブ終わったらみんなと晩御飯にあそこに行ってるな」と、学生の行動が手に取るように分ることが必要である。つまり「学生の行動を知り尽くして、理解し、そして承認する」という事を学生指導で実践することが望まれる。

有効な承認の言葉として、次のような例があげられる：「このペースでやれば、目標どおりになるよ!」、「ずいぶん捗ったね。君は循環器分野が得意なんだね。この調子でやれば、試験は大丈夫だよ!」、「相当やったね。その調子で学年末の総合試験までがんばって! 応援するよ!」、「りっぱなレポートになったね。発想がユニークで、独創性があるから、将来何か発見しそうな感じがするよ。素晴らしいね!」、「欠席しないで、がんばったね! うれしいよ!」。

このように承認できる良い材料がある時に、指導教員から言われたことが心の奥に浸み込み、さらに良い材料を多くしようと学生の意気込みが変わってくる。この変化に気づくことが大切である。学生の内なる行動の基盤が良い方向に向かえば、それを強化していく。そして、学生本人が「自分で自分を励まして学習する」と言うことも教えていく。逆に失敗したとか、計画倒れの時には、自分を励ますことも行い、気分転換を図ったり、失敗を乗り切れるようにする。このようにして、学生の意欲を強化していく。

事例：

A：4年生のCBTで留年した学生：

2回目の4年生の1学期には毎週1回約1時間ほど話を聞きました。忍耐強く聞きながら、「良くやった」とか、「上出来!」と言う言葉などで承認した。特に良いと感じたことに対して、ぐっと力入れて相槌を入れながら「素晴らしい!」「うれしいよ!」と承認していった。1学期中面談をやっていると、学生の考えが段々深く分かって来た。同時に、学生はこういうことをしたら「あの先生は喜んでくれ、承認してくれるんだなあ」と言うことを感じ取ったようだった。2学期は2週に一度位の面談のペースにしたが、自ら計画を立て、実行できるようになっていった。すなわち、CBTまでどういうやり方で、どのようなピッチでやるかを計画し、その予定で進行していることが確認できた。そして2学期の終わりには、「勉強の仕方も分かってきたし、勉学に喜びを感じる」と感想を言ったので、安心する事ができた。CBTの結果は、クラス上位の3分の1になっていた。

B：低学力の6年生：

6年で留年した学生の事例で、短期記憶が非常に悪く、30分くらい前に言ったことが何も残らないほどであった。そこで担当した指導教員は、当初種々の提案を学生にしたが、ほとんど前へ進まなかった。そこで、多くの試行錯誤を重ねた経験から、指導教員は「とりあえず話を聞く」ことに徹した。そうして、相当面談回数を重ねている内に、学生が「どんなことをした」とか、「自分がどういうことをしたい」とかを言うようになってきた。このような発言がでた時に、指導教員はそのことを喜んで承認したのである。この指導方法を繰り返しているうちに、自律的な勉学スタイルが学生の中で出来上がってきた。そして2学期には医学的に内容が深いとも言えるようになり、模擬試験でのクラス順位が60番台に上がり、無事卒業できた。

X 意欲の向上から学習習慣の確立へ

学習意欲と学習習慣との関係を見た結果から言えることは、両者に正の関係があり、学習意欲が高ければ学習習慣が身についていくことである。我々は医療人を育成するときには生涯学習習慣をつけさせ

るようにしなければならない。

そのため学生時代に意欲を上げる方策を実践して指導しておく、結果として学習習慣を身につけることになる。このようにして、生涯学習につながる学習習慣の確立した学生を社会に輩出する医育機関の使命が全うできる。

引用文献

1. 文部科学省. 平成27年度医学部入学定員の増員について 2014 [cited 2015 April 25]. Available from: http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afiel-dfile/2014/10/22/1352932_01_1.pdf.
2. 私立大学情報教育協会. 私立大学教員の授業改善白書(平成22年度の調査結果) 2011[cited 2015 April 25]. Available from: <http://www.juce.jp/LINK/report/hakusho2010/hakusho2010.pdf>.
3. Vygotsky LS. (1978) Mind in society: Development of higher psychological processes. Harvard University Press.
4. Grigorenko E, Sternberg RJ. (1998) Dynamic Testing. Psychological Bulletin. 124: 75-111.
5. Maslow AH. (1943) A theory of human motivation. Psychological Review 50: 370-396.